

強化戦略プラン

競技団体名：（一社）日本バイアスロン連盟

競技団体統括責任者： ウバルド・プルッカー
連絡先

TEL： 011-702-1234

FAX： 011-702-1235

E-Mail： office@biathlon.or.jp

本強化戦略プランは、「第2期スポーツ基本計画(平成29年3月24日文部科学省策定)」及び「競技力強化のための今後の支援方針(鈴木プラン)(平成28年10月3日スポーツ庁策定)」を踏まえ、中央競技団体が中長期の強化戦略を策定し、日常的・継続的に更新しつつ実践し、自律的・効果的かつ計画的に競技力を強化していくためのものです。

強化戦略プラン（競技団体共通）

バージョン管理

強化戦略プランの改定履歴を記載する。

バージョン	日付	作成・改定者	修正・変更点
1.0	2013. 04. 23	小館 操	バージョン 1.0作成
1.0	2014. 11. 1	出口 弘之	バージョン 1.0作成
1.0	2017. 05. 31	ウバルド プルッカー	バージョン 1.0作成
1.0	2018. 10. 27	山瀬 功	バージョン 1.0作成

○バージョン管理

軽微な改定: 小数点に1を加算 例) 1.0 → 1.1

大規模な改定: 整数に1を加算 例) 1.0 → 2.0

■ 共通理念

スポーツ基本法、第2期スポーツ基本計画及び今後の支援方針を踏まえ、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会や2022年の北京オリンピック・パラリンピック競技大会で日本が優れた成績を収めるだけでなく、スポーツ庁をはじめ、日本オリンピック委員会(JOC)、日本パラリンピック委員会(JPC)、中央競技団体(NF)、日本スポーツ振興センター(JSC)等が連携・協働し、2020年以降を見通した強力で持続可能な支援体制を構築し、継承していくことを目指す。

■ 強化戦略プラン実施における行動指針

行 動 指 針

1. 法令遵守

活動の実施及び活動費の使用に当たり、法令やその他諸規程を遵守するとともに、体制を整備し、高い倫理観を持って行動する。

2. 公正な会計

透明性ある事業運営として、財務、経理を適正に行い、公正な会計原則に則って事業を実施する。

3. 倫理

社会倫理に即し、本事業並びに関連する組織及び個人の名誉・信用を損なわないよう行動する。強化戦略プラン推進に係る活動や決定事項に対して、私的な問題や利害関係を持ち込まない。

4. 事業活動

強化戦略プランの実効化及び目標達成に向けて行動し、必要に応じて適切な情報開示に努める。

5. 情報管理

強化戦略プランに係る情報については、個人情報等に十分留意し、厳重に管理し適切に取り扱う。目的に反する使用や第三者への漏洩は行なわない。

6. 現場の規律

ハラスメントや人種差別、スポーツ指導における暴力などを許さず、風通しが良く働きやすい現場環境づくりに努める。

7. 不正行為の防止

ドーピング、八百長、賭博等の不正行為の防止に努める。

* * *

上記の行動指針に反する行動が確認された場合は、関係者間で早急に事実関係の確認を行い、原因究明と再発防止に向けた対策を講じる。

署名(統括責任者) 菊地 二久

競技団体名：一般社団法人日本バイアスロン連盟

概要

連盟創立の目的及び事業(定款抜粋)

(目的)

第3条この法人は、我が国におけるバイアスロン競技を統括し、当該競技の普及及び振興を図ることをもって、我が国におけるスポーツの振興を図ることを目的とする。

(事業)

第4条この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) バイアスロン競技の普及に関する事業
- (2) 我が国のバイアスロン競技に係る競技力の向上に関する事業
- (3) バイアスロン競技に係る競技大会に関する事業
- (4) 公益財団法人日本オリンピック委員会及び公益財団法人日本体育協会への加盟に関する事業
- (5) バイアスロン競技に係る国際的な団体への加盟に関する事業
- (6) その他この法人の目的を達成するための必要な事業

住所: 065-0030 札幌市東区北30条東12丁目4-9 クリーンビル3階

(一社)日本バイアスロン連盟

電話: 011-702-1234 FAX: 011-702-1235 URL: <http://biathlon.or.jp/league/>

会長: 伊部 廣明 事務局長: 山村 明

理念

強化戦略プランの諸活動を行うに当たり、関係者全員が共有するもの

ビジョン :

- 2020北京オリンピック大会に複数入賞者(チーム)の輩出、2026オリンピック大会でメダル1個の獲得
- タレント発掘・育成システムの構築

ミッション:

- 海外優秀コーチの指導のもと世界トップレベルのトレーニングの導入
- 海外優秀チームスタッフを導入
- 日本人コーチの指導能力の向上
- 海外強国チームとの合同トレーニング
- 競技用マテリアルを世界レベルまで品質向上
- ユニバーシアード及び次世代を担うユース・ジュニアの発掘・育成
- 事業予算の自己採算性能力の向上

バリュー: **スポーツを通じた人間形成**

日本バイアスロン連盟は、スポーツ振興基本計画に記載されている内容を実践すべくバイアスロン競技を日本に普及し発展させる。

以下、スポーツ振興基本計画総論抜粋: スポーツは、人生をより豊かにし、充実したものとするとともに、人間の身体的・精神的な欲求にこたえる世界共通の人類の文化の一つである。心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要な不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポ

一つに親しむことは、極めて大きな意義を有している。

すなわち、スポーツは、体を動かすという人間の本源的な欲求にこたえたとともに、爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、喜びをもたらし、さらには、体力の向上や、精神的なストレスの発散、生活習慣病の予防など、心身の両面にわたる健康の保持増進に資するものである。特に、高齢化の急激な進展や、生活が便利になること等による体を動かす機会の減少が予想される 21 世紀の社会において、生涯にわたりスポーツに親しむことができる豊かな「スポーツライフ」を送ることは大きな意義がある。

また、スポーツは、人間の可能性の極限を追求する営みという意義を有しており、競技スポーツに打ち込む競技者のひたむきな姿は、国民のスポーツへの関心を高め、国民に夢や感動を与えるなど、活力ある健全な社会の形成にも貢献するものである。

更に、スポーツは、社会的に次のような意義も有し、その振興を一層促進していくための基盤の整備・充実を図ることは、従前にも増して国や地方公共団体の重要な責務の一つとなっている。

ア

スポーツは、青少年の心身の健全な発達を促すものであり、特に自己責任、克己心やフェアプレイの精神を培うものである。また、仲間や指導者との交流を通じて、青少年のコミュニケーション能力を育成し、豊かな心と他人に対する思いやりをはぐくむ。さらに、様々な要因による子どもたちの精神的なストレスの解消にもなり、多様な価値観を認めあう機会を与えるなど、青少年の健全育成に資する。

イ

スポーツを通じて住民が交流を深めていくことは、住民相互の新たな連携を促進するとともに、住民が一つの目標に向い共に努力し達成感を味わうことや地域に誇りと愛着を感じるにより、地域の一体感や活力が醸成され、人間関係の希薄化などの問題を抱えている地域社会の再生にもつながるなど、地域における連帯感の醸成に資する。

ウ

スポーツを振興することは、スポーツ産業の広がりとともに伴う雇用創出等の経済的効果を生み、我が国の経済の発展に寄与するとともに、国民の心身両面にわたる健康の保持増進に大きく貢献し、医療費の節減の効果等が期待されるなど、国民経済に寄与する。

エ

スポーツは世界共通の文化の一つであり、言語や生活習慣の違いを超え、同一のルールの下で互いに競うことにより、世界の人々との相互の理解や認識を一層深めることができるなど、国際的な友好と親善に資する。

このように多様な意義を有する文化としてのスポーツは、現代社会に生きるすべての人々にとって欠くことのできないものとなっており、性別や年齢、障害の有無にかかわらず国民一人一人が自らスポーツを行うことにより心身ともに健康で活力ある生活を形成するよう努めることが期待される。

なお、人間とスポーツとのかかわりについては、スポーツを自ら行うことのほかに、スポーツをみて楽しむことやスポーツを支援することがある。スポーツをみて楽しむことは、スポーツの振興の面だけでなく、国民生活の質的向上やゆとりある生活の観点からも有意義である。

	<p>また、スポーツの支援については、例えば、ボランティアとしてスポーツの振興に積極的にかかわりながら、自己開発、自己実現を図ることを可能とする。人々は、このようにスポーツへの多様なかわりを通じて、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していくのである。従って、スポーツへの多様なかわりについても、その意義を踏まえ、促進を図っていくことが重要である。</p>
<p>実績</p>	<p>過去2大会のオリンピック・パラリンピック競技大会、主要国際大会での結果 【主要国際大会結果】リザルトを貼付 2014ソチオリンピック 男子スプリント:71位 井佐英徳 女子パシュート:42位 立崎英由子 2018ピョンチャンオリンピック 男子インデビジュアル:64位 立崎幹人 女子スプリント:42位</p>
<p>目標 (現状可能な目標) (4年・8年)</p>	<p>オリンピック・パラリンピック競技大会におけるメダル獲得や入賞などの数値目標 【2022年北京大会(冬季)】 8位以内:個人種目×1、団体種目×1 【2026年大会(冬季)】 3位以内:個人種目×1 8位以内:個人種目×1、団体種目×1</p>
<p>強化責任者</p>	<p>上記の目標の達成に関しての責任者 菊地二久専務理事 【強化責任者】 氏名(NFの役職、所属先) ウバルド・プルッカー(選手強化委員会 委員長、一般社団法人日本バイアスロン連盟) 【強化単位責任者】※強化責任者と同一の場合は「同上」とする 氏名(NFの役職、所属先) 同上</p>
<p>アスリート 指導者 (コーチ) スタッフ</p>	<p>【アスリート】 アスリート助成やNF強化対象選手数を記載してください。 アスリート助成:ユース 小足さくら・上田千春 NF強化対象選手 女子:立崎英由子・田中友理恵・前田沙理・田中きらり、蜂須賀明日香 男子:立崎幹人・尾崎光輔・猪股和弥・枋木司、倍賞和己 【ナショナルコーチ、専任コーチ等の設定】</p>

	<p>現在配置しているコーチ等の役職(氏名)や人数を記載してください。</p> <p>専任コーチ:山瀬功、出口弘之、菊地二久、石山昭男</p> <p>強化委員:ウバルドプルッカー、出口弘之、菊地二久、山瀬功、菅恭司、佐藤文隆、能登直、笠原辰巳、井佐英徳、高橋世是夫、遠藤智徳、渡部恒</p>
広報戦略	<p>広報における基本方針を記載してください。</p> <p>イベントを通じた次世代アスリートの発掘</p> <p>普及活動によるバイアスロン競技認知度の向上</p> <p>バイアスロン新聞発刊</p>
財務計画	<p>強化戦略プラン推進における、資金調達や財務運営改善における方針を記してください。</p> <p>【2022年東京大会(冬季)まで】</p> <p>資金調計画 作成中</p> <p>マーケティング委託会社を通じた収益事業開発</p> <p>スポンサーシップ制度、ライセンス制度、パートナー制度</p> <p>【2026年大会(冬季)まで】</p> <p>作成中</p> <p>マーケティング委託会社を通じ長期の事業戦略を構築中</p>

強化戦略プラン

種別又は種目、強化単位名

競技団体統括責任者： ウバルド・プルッカー

連絡先

TEL： 011-702-1234

FAX： 011-702-1235

E-Mail： office@biathlon.or.jp

強化戦略プラン(種目又は種別、強化単位)

バージョン管理

強化戦略プランの改定履歴を記載する。

バージョン	日付	作成・改定者	修正・変更点
1.0	2013. 04. 23	小舘 操	バージョン1.0 作成
1.0	2014. 11. 1	出口 弘之	バージョン1.0 作成
1.0	2017. 05. 31	ウバルド プルッカー	バージョン1.1 作成
1.0	2018. 10. 26	ウバルド プルッカー	バージョン1.2 作成

○バージョン管理

軽微な改定: 小数点に1を加算 例) 1.0 → 1.1

大規模な改定: 整数に1を加算 例) 1.0 → 2.0

目次

1. 現状と目標	10
1-1: 現状	10
1-1-1: 背景と現状の競技力	10
1-1-2: 優位性と課題	12
1-2: 目標(現状可能な目標)とマイルストーン	13
1-2-1: 2020年東京大会(夏季)／2022年北京大会(冬季)	13
1-2-2: 2024年大会(夏季)／2026年大会(冬季)	15
2. 戦略方針	16
2-1: 競技力強化のための戦略	16
2-1-1: 2020年東京大会(夏季)／2022年北京大会(冬季)の目標達成に向けた戦略	16
2-1-2: 2024年大会(夏季)／2026年大会(冬季)の目標達成に向けた戦略	16
2-2: ターゲットアスリート、指導者(コーチ)	16
2-3: ガバナンス	16
2-3-1: 日本代表選考	16
2-3-2: スポーツ・インテグリティ(ドーピング、八百長、賭博等)	17
2-3-3: 人材育成・確保	17
2-3-4: 競技種目における育成・強化体制	17
3. モニタリング及び検証・評価	17
4. 別添資料	18

1. 現状と目標

1-1:現状

1-1-1:背景と現状の競技力

過去2大会のオリンピック・パラリンピック競技大会や主要国際大会での成績とその取り組みにおける検証・評価の結果を記載してください。具体的には、国際競技水準や各国動向を踏まえた上で、現在の日本の競技力を簡潔に記載してください。

国際的要因:

1. 強豪国はジュニア・ユースの育成システムが確立されている
2. 強豪国は銃使用許可年齢が低く、日本チームとの射撃能力差が非常に大きい

政治的要因:

1. 日本に於ける銃規制問題
2. シェンゲン協定
3. 冬季のナショナルトレーニングセンターの確立

経済的要因:

1. 大会参加規程が複雑(オリンピック・WC)で継続的に参加しなければ参加枠減少
2. 専門スタッフが多く必要で経費大
3. ジュニア育成に必要な環境・資材不足

社会的要因:

1. 国内に於けるクロスカントリースキー選手の減少
2. 拠点が自衛隊施設内にあり自由に使用できず、手続きが煩雑である
3. バイアスロン体験射撃することによりストレス解消になっている

IFの現状:

1. 国際バイアスロン連合は今年度の kongress により新役員に改選
2. 強豪国中心に競技規則が変更(メディア・スポンサー関係)
3. シェンゲン協定に不利益な国への IBU からのサポート不足

NFの現状:

1. タレント発掘育成開始(6年目) 受け皿が確立されていない
2. タレントはレーザーライフルで射撃育成
3. 2016年度から外国人監督招聘
4. 2017年度ジュニア・ユース世界選手権にユース選手1名参加
5. 2018年度外国人射撃コーチを招聘
6. 2018年度ユニバーシアード冬季大会に選手派遣

技術的要因:

1. 一貫したトレーニングシステムが確立していない
2. 日本選手に合致したマテリアル開発
3. 射撃コーチのスキル向上

ユース期:

1. 指導者不足
2. 射撃トレーニング資材不足
3. トレーニングシステムの確立に向け協議中

検証・評価の結果

オリンピック前2大会評価の結果を記載するにあたり、本格的に連盟が関与し計画されたトレーニングが行われたのは、平昌オリンピックの2シーズン前からであったことを考慮しなければならない。理由は、2000年以降、選手の強化がチームの考えを主体に行われ、以後成績の低迷する原因となった経緯がある。※分析資料参照

- ① オリンピック大会後の成績の低下＝スタッフ・選手の意味のない交代が起きていて、経験値及び指導内容が継続されていなかった。
- ② 一度国別順位が23位以下に低迷した男子は、ソチオリンピック後国別順位を上げることが出来ない。理由は、ポイントゲッターは最低3名枠が必要なところ、23位以下の国は2名のみでの大会参加枠しかないため。
- ③ 過去2大会シーズンの比較

OWG 大会名	シーズン	女子順位	国別ポイント	ポイント獲得選手	男子順位	ポイント	ポイント獲得選手
平昌	2017-18	17	3501	立崎美、古谷	24	2141	立崎幹
ソチ	2013-14	24	1184	立崎美	26	1133	無

各国の動向(国々の内情を把握)

列強:ドイツ、フランス、ノルウェー、スウェーデン、オーストリア、イタリア、ロシア、ベラルーシ

1. ユース・ジュニアの育成システムが確立(競技人口が多い)
2. 低年齢から射撃ができる

中位国:アメリカ、カナダ、スロベニア、スロバキア、チェコ、スイ

- 1 低年齢から射撃ができる
- 2 選手層は薄いメダリストを輩出、ジュニア・ユース選手が多い

日本の当面ライバルとなる国:ポーランド、ベルギー、ブルガリア、フィンランド、中国、韓国

1. 継続的な選手育成が上手くいっていない

目標の設定

Specific＝ 具体的、わかりやすい

Measurable＝計測可能、数字になっている

Agreed upon＝同意して、達成可能な

Realistic＝現実的で結果志向

Timely＝期限が明確、今日やるなど

1-1-2:優位性と課題

国際競技水準や強豪国と比較して、NF(種別、種目)の強みとなる優位性がどこにあり、内部資源や外部環境を踏まえ、課題がどこにあるかについて、優先順位の高いものを記載してください。

種別、種目の優位性

過去オリンピック大会第6位、世界選手権大会第4位と成果を出した種目は、インディビデュアルである。理由は、スキー走力の差をペナルティー加算タイム(1分)が加算されることにより、射撃の命中率が良い時にその成果が出ていると思われる。

しかし、今後のオリンピック大会に安定して入賞以上の成果を求めるとすれば、走力の向上が必須の強化対象になる。

従って、2年前から始めた持久力能力の向上トレーニングの質・量を向上させることが余裕のある射撃につながり、結果良い成績に繋がる。

他の国と比較する環境等

1. 国内に於けるトレーニング環境が国際基準にない
2. 拠点が自衛隊施設内にあり、使用申請に時間を要する
3. 射撃とローラースキートレーニングできる施設が国内に1ヶ所しかない
4. 雪上トレーニングは自然降雪に左右され、夏季にスキートレーニングする環境がない

課題

- ① ユース・ジュニアの発掘育成も始めているが、バイアスロン競技用銃を撃てる年代になるのが、日本の現在の法律では特例でも18歳以上となっていて、本格的なバイアスロントレーニングを始めるのが年齢的に遅くなり、若い時代に養う射撃の感覚を学ぶ時期を失っている問題がある。
- ② 上記内容に付随して、国内において射撃を含むトレーニングができる場所が少なく、子供たちのトレーニングする場所、機会が外国に比し極端に少ない。
- ③ 現在国内に選手・チームが少なく競争意識が育たないため、海外にその機会を求めざるを得ない。

1-2:目標(現状可能な目標)とマイルストーン

1-2-1:2022年北京大会(冬季)

年	目標(現状可能な目標)	左記を構成する成功要因
2021 ~ 2022	OWG 女子リレー 10位 女子個人3位×1名 ミックスリレー 10位	1. 射撃コーチの招聘 2. 走力コーチの招聘 3. 男子参加枠2を確保

年度	マイルストーン(検証指標)	左記を構成する成功要因
2020 ~ 2021	WCH 男子個人 30位×1名、60位×1名 リレー15位 WCH 女子個人 10位×1名、15位×1名 リレー10位 WCH シングルミックスリレー 8位 WC 男子40位内×2回 WC 女子個人総合 15位×1名、30位×1名 女子4人は40位内でポイント獲得 WC 国別順位 女子15位、男子20~21位	1. 射撃・走力コーチ招聘 2. 列強国との合同トレーニング 3. 海外サマーバイアスロン大会への参加
2019 ~ 2020	WCH 男子個人 30位×1名、60位×1名 リレー15位 WCH 女子個人 10位×1名、15位×1名 リレー10位 WCH シングルミックスリレー 8位 WC 女子個人総合 15位×1名、30位×1名	1. 射撃・走力コーチ招聘 2. 海外サマーバイアスロン大会への参加 3. ジュニア・ユース強化育成 4. 高地トレーニング・医科学サポート活用 5. 所属チームとの連携強化 6. シェンゲン協定 7. 強化費確保

	<p>女子4人は40位内でポイント獲得</p> <p>WC 国別順位</p> <p>女子16～15位、男子22～21位</p>	
<p>2018 ～ 2019</p>	<p>WCH 男子個人</p> <p>30位×1名、60位×1名</p> <p>リレー15位</p> <p>WCH 女子個人</p> <p>10位×1名、15位×1名</p> <p>リレー10位</p> <p>WCH シングルミックスリレー 8位</p> <p>WC 女子個人総合</p> <p>20位×1名、50位×1名</p> <p>WC 国別順位</p> <p>女子:17位、男子:23位</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 強化方針の決定 2. 射撃コーチの外人招聘 3. フィジカル強化 4. メンタル強化 5. マテリアル強化 6. 日本人コーチのスキルアップ 7. ジュニア・ユースの強化育成 8. 所属チームとの連携 9. シェンゲン協定

1-2-2:2026年大会(冬季)現在強化委員会で検討作成中

年	目標(現状可能な目標)	左記を構成する成功要因
2025 ~ 2026	OWG 個人・リレー6位入賞	タレント育成選手の活躍

年度	マイルストーン(検証指標)	左記を構成する成功要因
2024 ~ 2025	WCH WC 国別順位:女子15位、男子19位	
2023 ~ 2024	WCH WC 国別順位:女子15位、男子20位	タレント1期生シニアへ
2022 ~ 2023	WCH WC 国別順位:女子15位、男子20位	
2021 ~ 2022	OWG 女子個人種目3位 女子リレー10位 ミックスリレー10位 男子参加2名 WC 国別順位:女子15位、男子20位	2026への新体制確立
2020 ~ 2021	WC 女子個総合 15位×1名、30位×1名 WC 国別順位:女子15位 男子20位~21位	
2019 ~ 2020	WC 女子個人総合 15位×1名、30位×1名 WC 国別順位:女子16位~15位 男子22位~21位	タレント1期生ジュニアへ 事業申請 アンチドーピングセミナーの開催 タレント発掘全国展開へ
2018 ~ 2019	WC 女子個人総合 20位×1名、50位×1名 WC 国別順位:女子17位、男子23位	ユニバーシアード冬季大会 ジュニア・ユース世界選手権大会

3. 戦略方針

2-1: 競技力強化のための戦略

2-1-1: 2022年北京大会(冬季)の目標達成に向けた戦略

夏季及び冬季オリンピック・パラリンピック競技大会の目標を構成する成功要因(前ページ)を実現し、目標やマイルストーンを達成するための戦略とその必要性を記載してください。

例: 大きな方向性～射撃の%向上させるためには? 世界の 8 位のレベルは%程度～そうなるためにはどうするか戦略～射撃に適した体格とか? 現在強化委員会で作成中

1. 外国人専門コーチの招聘(射撃・走力)
2. 競技種目に特化した強化
3. 日本人に合致したマテリアル開発

2-1-2: 2026年大会(冬季)の目標達成に向けた戦略

夏季及び冬季オリンピック・パラリンピック競技大会の目標を構成する成功要因(前ページ)を実現し、目標やマイルストーンを達成するための戦略とその必要性を記載してください。

ここでは、現在既に活躍しているアスリートだけではなく、ジュニアやユースのアスリート等、8年後に活躍する可能性がある次世代のアスリートについても記載し、2020年東京大会(夏季)／2022年北京大会(冬季)以降も続く強力で持続可能な育成・強化の仕組みを確立させることを考慮してください。

例: 大きな方向性～射撃の%向上させるためには? 世界の 8 位のレベルは%程度～そうなるためにはどうするか戦略～射撃に適した体格とか? 現在強化委員会で作成中

1. タレント発掘育成事業の全国展開
2. 日本人コーチの指導力向上

2-2: ターゲットアスリート、指導者(コーチ)

(別添1)

2022、2026 可能性のある具体的に選手名とコーチの名簿添付

2022 選手名: 立崎芙由子・前田沙理・田中友理恵・田中きらり・蜂須賀明香
立崎幹人・枋木司・尾崎光輔・倍賞和己・児玉翔平・猪股和弥

指導者: ウバルド・イリオ・山瀬功・佐藤文隆・笠原辰己・能登直・遠藤智徳・永井順二・井佐英徳

2026 選手名: 田中きらり・蜂須賀明香・五十嵐美鈴・福田光・水木彩・佐々木美沙・岩佐泰葉・小足さくら・尾崎光輔・倍賞和己・高畑弘也・木綿啓太・中嶋央二郎・伊藤大輝・上田千春

指導者: 能登直・永井順二・井佐英徳

2-3: ガバナンス

2-3-1: 日本代表選考

- 1) 日本代表選手
- 2) 日本代表監督・指導者(コーチ)等

選考基準内規別送

日本代表選手行動規範

平成30年度海外派遣選考要領

2-3-2:スポーツ・インテグリティ(ドーピング、八百長、賭博等)

選考基準内規別送

ドーピング防止規定・反社会的勢力との関係遮断に関する規定
スポーツに於ける暴力行為等相談窓口設置規程

2-3-3:人材育成・確保

今後2020年までに作成

タレント発掘の全国展開(選手・指導者)

2-3-4:競技種目における育成・強化体制

連盟組織図別送

平成30年度日本バイアスロン連盟組織図

4. モニタリング及び検証・評価

モニタリング及び 検証・評価の項目	実施時期	実施者	備考
目標(現状可能な目標)と マイルストーン	毎年3月 末	強化委員会	
競技力強化のための施策	前年12月	強化委員会	所属チームとの連携
ガバナンス・コンプライアンス	毎年度末 理事会	理事会	

5. 別添資料

・組織体制図

NFの強化体制がわかる資料の提示をお願いします

・年間実施計画

NF全体としての強化活動のスケジュールがわかる資料の提示をお願いします
(強化合宿・競技大会、理事会・委員会等ミーティング、主催研修会、セミナー等)

・分析結果

本資料の説明を裏付ける詳細データ(エビデンス)の提示をお願いします

・スポーツ・インテグリティに関する規程

NFにおいて策定している規程やガイドライン、取り組みに関する説明資料等について提示をお願いします

(ドーピング、八百長、賭博等)